

# 水俣病事件と教師

## —水俣での社会科教育実践—

西垣光\*・一盛真\*\*

NISHIGAKI HIKARI・ICHIMORI MAKOTO

(＊地域教育学科4年、\*\*准教授)

### はじめに

公害が社会問題化し、組織化された大規模な住民運動が展開されるようになるのは、高度経済成長期に入ってからのことである。「三島・沼津・清水町の運動を嚆矢として、一九六〇年代半ば以降全国各地で公害や大規模開発に反対する運動が展開され、多くの教師たちがそこに参加していった。彼ら/彼女らは、問題告発のための調査や資料作成を担い、住民の学習活動を支えながら、さらにそこで得た知見を教育課程として編成し、公害教育の授業を実践していくことになった。」<sup>1</sup>公害教育はそうした教師たちが参加する公害反対住民運動のなかで成立する。

1971年1月、「東京で開催された日教組・日高教教育研究全国集会において『公害と教育』分科会が設置され、公害教育に関わる各地の実践を集中的に議論する場が設置される。さらにその分科会参加者有志によって同年夏には『公害と教育』研究会という自主的研究団体が次のような目的を掲げて設立されている。

この会は、公害から子どもを守り、公害のない国土をよみがえらせるための教育をすすめる全国の教師や市民によってつくられる。この会は、教研活動と結合しながら、なによりも、地域にたち現れている公害の諸実態を科学的に明らかにしつつ、地域に根ざす教育をめざして研究し、実践することを目的とする。」<sup>2</sup>

この公害教育は、現在、環境教育に進化(変化)したとされる。1970年代半ば、全国教研集会の「公害と教育」分科会の報告を執筆した藤岡貞彦と福島達夫は、「従来四大公害地を中心に提起されてきた公害学習に対して環境学習、自然学習のこれからの報告をしめす実践がふえてきた」という状況認識にもとづき、最終節を「環境問題と教育」としたうえで、次のようにまとめていた。

環境問題に取り組む先駆的事例は、いうまでもなく公害先進地の教師集団の実験の中にあった。しかし、今日の環境問題はよりふかくひろく、先進・後進をこえてとらえられなくてはならない。本分科会の最終日、環境学

習をめぐって、「あくまで水俣を原点として、公害教育をすすめよ」とする熊本の発言と、「ひろく自然学習をもふくめた学習を」とする東北地域の発言が論争風に展開されたことは、まさに今日の状況の反映にほかならない。論争はより生産的に継続され、発展されなくてはならない。

もとより、私たちは、公害をしゃ断し、公害教育の時代は終わったとする管製環境教育の提唱に十分な警戒をはらいつつ、公害反対教育運動の流れを再確認し、その系譜のうえに、よりひろい〈教育における環境問題〉をとらえる視野を切りひろくべき秋にきているのではないか。」<sup>3</sup>

「公害教育については、1960年代後半から1970年代にかけて数多くの文献が刊行されたが、1980年代半ば以降環境教育という用語の普及に反比例するようにその数は減じていった」<sup>4</sup>。そして、1990年代から2000年代にかけて環境教育が、「環境基本法体制と『総合的な学習の時間』導入とを挺子として学校内外で広がって」<sup>5</sup>いった。公害教育から環境教育へのこの急激な転換のなかで、公害教育は現実には環境教育と断絶され、公害教育や公害教育実践は語られなくなる。

近年、環境教育研究では、ようやく公害教育を見直そうという動きがみられるようになる。2015年7月時点、安藤聡彦は以下のように述べている。

いま環境教育研究が公害教育の過去と現在、そして未来について理解していることはきわめて限られている。

そもそも公害教育の地図はどのように描かれるべきなのか。公害教育の担い手はどこに誰であり、彼女/彼は何を考え、何をしてきた and/or いるのだろうか。公害教育の組織化、制度化はどうなされてきた and/or いるのだろうか。そして、公害教育にはいま何が求められており、また公害教育は何をめざしこれからどうあるべきなのだろうか—相互に切り離すことができないこれら一連の間

<sup>1</sup> 安藤聡彦『『公害教育から環境教育へ』再考』、佐藤一子編『地域学習の創造 地域再生への学びを拓く』東京大学出版会、2015、p.55

<sup>2</sup> 安藤聡彦『『公害教育から環境教育へ』再考』、佐藤一子編『地域学習の創造 地域再生への学びを拓く』東京大学出版会、2015、p.58

<sup>3</sup> 同上、pp.62-63

<sup>4</sup> 安藤聡彦「公害教育を問うことの意味」、『環境教育VOL.25 NO.1』日本環境教育学会、2015、p.7

<sup>5</sup> 安藤聡彦『『公害教育から環境教育へ』再考』、佐藤一子編『地域学習の創造 地域再生への学びを拓く』東京大学出版会、2015、p.65

いに応答していくことが環境教育研究には求められている。環境教育研究は公害教育について何を知ってきたのか、何を知っているのかを反省し、何を知るべきであるのかを探求していくことが日本における環境教育/環境教育研究の歴史を理解するために、そしてポスト 3.11 の日本社会において環境教育/環境教育研究のあり方を再定義するために必要なだと筆者は考える。<sup>6</sup>

公害教育のなかでも安藤聡彦は、「あるべき環境教育の姿を水俣で考えたい」<sup>7</sup>と水俣病に着目すべきだと主張している。本稿では、水俣病事件に教師がどう向き合い、いかなる教育実践を地域の中で展開したのかを検討する。水俣病事件の教育実践として著名なのは、田中裕一の授業実践「日本の公害―水俣病」である。これは日本ではじめて取り組まれた公害教育実践である。田中裕一の教育実践について、和井田清司は「水俣病をタブー視する地域や教育行政のもとで、このような授業をすることは、勇気と決断のいることであつた」<sup>8</sup>と評価している。1968 年に熊本市の研究授業で行われた田中の授業実践は全国的に有名になる一方で、水俣の地で行われた教師たちの水俣病事件の教材化の取り組みはほとんど知られていない。本稿では、現地水俣で水俣病事件をはじめて実践した教師、廣瀬武に着目する。

水俣は企業城下町と言われており、チッソという会社があるおかげで現在の水俣があるという意識が強い。当時水俣病患者は周囲から差別され孤立状態、また教室には、水俣病のような症状をもつ子どもや身内を水俣病によって亡くしている子ども、親がチッソで働いている子どもがいるという状況である。

廣瀬武は水俣芦北公害研究サークルの 2 代目の会長であり、現地水俣における水俣病事件の教育実践推進の中心的な役割を果たした。廣瀬武に関する先行研究は安藤聡彦「水俣市における『水俣病の授業』の誕生」（『公害教育運動の基礎的研究；環境教育史研究の構築 研究成果報告書』2012 年）がある。廣瀬武の授業実践の成立過程を明らかにするという意味では、安藤論文と本稿は重なる点が多い。しかし、ここでは、廣瀬武の歩みを通して、彼がどのように水俣病事件に向き合っていたかを明らかにし、そこから水俣病事件の授業実践の意味を明らかにしたい。

## 第1章 水俣病発生初期の学校と教師

### 沈黙の時期

当時の水俣がどのような状態であつたのか。『水俣病・授業実践のために』に以下のようにまとめられている。

1953 年の発生から 59 年の「ネコ 400 号」の発病による

原因発見までは「ネコおどり病」「奇病」「伝染病」と騒がれ、排除され、患者とその家族はどん底の生活に追いやられていった。（中略）

53 年から 59 年まで患者や家族は、水俣病原因かくしの中で孤独なたたかいを強いられた。ただひとつのとりで「水俣病患者家庭互助会」から叫びつづける患者家族の声に、思いを同じくする市民はほとんどいなく、この 6 年間というものはまさに、言語に絶する苦しみと差別受難の時期といえる。そして、32 人の患者が死亡した。

59 年 12 月 30 日、互助会は泣く泣く「見舞金契約」に調印した。死亡 30 万円、成人患者 10 万円、子ども 3 万円はまさに人命無視、企業優先の極点であり、患者の口封じ以外の何ものでもなかった。この見舞金契約は、水俣病原因判明に対する患者への見舞いというよりは、見舞金契約調印により、「水俣病は終わった」とする風潮の中で、新たな水俣病かくしが 68 年 9 月の国による水俣病公害認定まで続く。

59 年から 68 年までの 10 年間は、水俣病沈黙と抹殺の交錯、水俣病問題タブー視などの時期であり、患者とその家族にとってはまた、受難の時期であつた。<sup>9</sup>

### 学校の様相

水俣市の学校に通う子どもたちやその家族の中にも水俣病患者はいた。そのため、学校の中でも水俣病による異変が起こり始めていた。1956 年 5 月 1 日に公式確認された水俣病。それより前の 1950 年頃、杉本雄が見た当時の学校の様子が『のさり 水俣漁師、杉本家の記録より』に書かれている。

雄が小学五年生になった頃、なんとも奇妙な行動をする生徒が次々と校内に現れるようになった。

口からよだれを溢れさせている子供が、各クラスに常に二～三人ずつはおり、体育の授業のときは、教師がその子供たちを校庭の一隅に集めておさめ、見学者という扱いで出席簿をつけている。

彼らは一様に「頭が痛い」「腹が痛い」などと訴えているのだが、教師は「それは嘘たい。本当は運動神経が悪くて身体のバランスがとれないからたい」と顎をしゃくりながら言う。

恨めしげな彼らの表情がどうしても頭から離れない雄は、「先生、あの子たち、本当はどげんなつとですか？」と訊いてみたことがある。だが、「人のことなんか深く考えんでもよか。それより、勉強せにゃあかんたい」と教

<sup>6</sup> 安藤聡彦「公害教育を問うことの意味」、『環境教育 VOL.25 NO.1』日本環境教育学会、2015、p.10

<sup>7</sup> 安藤聡彦「田中裕一『水俣病の授業』はどうつくられたか」、教育科学研究会編集『教育』No.830、かもがわ出版、2015、p.25

<sup>8</sup> 和井田清司編『戦後日本の教育実践―リーディングス・田中裕一』学文社、2010、p.23

<sup>9</sup> 水俣芦北公害研究サークル『水俣病・授業実践のために 学習材・資料編 2007 改訂版』水俣病センター相思社、2007、p.2

師はぶいと横を向いてしまう。<sup>10</sup>

「人のことなんか深く考えでもよか。それより、勉強せにやあかんたい」。水俣の地において、教師、学校は水俣病の子どもの悲しみを受け止める力を持ち合わせていなかった。工場が、漁業の村を崩壊させていったように、近代の学力観に足らわれている教師は、子どもたちの「自立」を担っていた。本来「学力」とは社会的な性質のものであるにもかかわらず。

口からよだれを流す生徒の数はその後も増え続け、一年三クラスのなかのークラス、つまり全校では六クラス分の生徒、という尋常ではない数となるが、大人たちの事情が飲み込めないまま、生徒たちは次第に彼らの存在を気にしなくなった。

一九五一年、雄は袋中学校に進学。やはり、各クラスには二〜三人、具合の悪い生徒が必ず存在した。

ただ、今までと違うのは、彼らの多くは、入学式以来、学校にはほとんど姿を見せず、まるで亡霊のような存在であったということだ。相も変わらず教師も学友も一切そのことには触れようとしない。それが至極当然のように何事もないまま肅々と月日は流れていった。<sup>11</sup>

水俣病とみられる子どもたちは、「学校にはほとんど姿を見せず、まるで亡霊のような存在であった」、「教師も学友も一切そのことに触れようとしない」と書かれているように、水俣病事件が人と人との関係を断ち切る、魂と魂を断ち切るという本質が、教室の中にも 1950 年代に表れていた。

## 教師とは、学校とは

下田綾子（旧姓・田中）が当時学校で経験したことが『証言 水俣病』に書かれている。下田綾子の二人の妹、田中静子、実子は、1956 年に水俣病を発病している。

朝は私が食事の用意をしたり、みんなのお弁当を作っていましたので、学校には遅刻ばかりしよったんですけど、いつも先生は理由も聞かずに運動場の真ん中に立たせよったです。おかずを買うお金がないときはお弁当も持って行けませんでした。貧乏だったから先生に構ってもらえませんでした。だから私も学校がいやでいやで、あんまり行きませんでした。先生がそういうふうだったものですから、行ったときにはみんなからいじめられました。掃除当番のときには、「奇病がうつつで（うつるから）、机や椅子にさわんな」と友だちにいわれた。

<sup>12</sup>

当時、田中家は、二人の妹が水俣病にかかって入院しているため、母は付き添いでずっと病院に、父は昼間は医療費や生活費を稼ぐために働いて、夜は病院に行っていた。そのため、中学生の兄と小学生の綾子、妹、弟の子ども四人だけで暮らしていたという。1956 年当時、水俣病の原因はまだ不明だったため、猫からうつされた伝染病と周りの人に言われ、「買い物に行ってもお金を手渡しでは受け取ってもらえずに箸やザルで受け取られたり、家の前を鼻つまんで通られたりして、誰からも声をかけられなくなりました」<sup>13</sup>と綾子は語っている。家族が突然原因不明の病気になり、田中家は周囲の人から差別されるようになっていた。そのような状況で遅刻をしながらも学校に通っていた綾子。その彼女に対して、教師は遅刻してくる理由も聞かず、暖かく教室に向かい入れるやさしさに欠けていた。

水俣病対策市民会議（後に、水俣病市民会議）設立の頃（1968 年）までは、水俣市の教師たちの間で水俣病に対する取り組みはほとんど見られなかった。1980 年代の前半から水俣市内や芦北町の小学校で公害教育の実践に携わってきた梅田卓治は、水俣第一小学校の児童であった当時（1960 年代後半）のことを以下のように述べている。

僕の小学校時代は教科書ではまだ四大公害病も載っていないし、（中略）公害認定が 1968 年ですね、昭和 43 年。裁判の結審は 1973 年。僕はその頃ちょうど小学生なんです。ちょうど腫れ物にさわるようにしてというか、おそらく学校の先生たちはタブーとして水俣病問題を取り上げなかったんだらうなと思うんですね。授業を受けた記憶はまったくないです。ただ身の回りには患者さんがいっぱいいたんです。<sup>14</sup>

その水俣第一小学校に梅田の入学直前まで勤務していたのが、広瀬武であった。

## 第 2 章 水俣病事件と広瀬武

### タブーの中の無関心

広瀬武は、1934 年（昭和 9 年）に熊本県水俣市で生まれる。水俣で育ち、1955 年（昭和 30 年）熊本大学卒業後、水俣市内の小学校の教師となり、1995 年（平成 7 年）に退職している。現在 82 歳である。

最初に赴任した水俣第一小学校には、1963 年 3 月まで勤務していた。そのときの自らの水俣病との関わりについて以下のように語っている。

私の水俣一小の 8 年間というのは、水俣病からまあ逃

<sup>10</sup> 藤崎童土『のさり 水俣漁師、杉本家の記憶より』新日本出版、2013、p.50

<sup>11</sup> 同上、p.52

<sup>12</sup> 下田綾子「幼い妹が『奇病』に」、栗原彬編『証言 水俣病』岩波新書、2000、p.34

<sup>13</sup> 同上、p.33

<sup>14</sup> 安藤聡彦「水俣市における『水俣病の授業』の誕生」、科研費報告書『公害教育運動の基礎的研究 環境教育史研究の構築 研究成果報告書』、2012、p.43

げていたということでしょうね。向き合っていなかった。そして、同じ一小的教師集団のなかでも水俣病が話題になることはなかった。気にはなってはおりましたけど、学校教育のなかで水俣病をどうしていくのかという、そういう視点からのお互いの話し合いはなかったです。そして、当時はね、水俣一小的のPTAの役員さんはチッソの陣内社宅の奥様方が多かった。そういうのも一つはあったかもしれません。それとやっぱりね、水俣はチッソあっての水俣だと、会社があるけん現在の水俣があるんだというそういう考え方が非常に強かったですからね、今でもありますけどね。まあそういうことや、それから受け持っている子どもたちの中にチッソ関係の家庭の子どもたちが大分おったということ。そういうことで教師自体がね、やっぱり水俣病から逃げていたと言った方がいいでしょうね。関心は持っていないながらも、どうすればいいのかという論議まではしていなかった。<sup>15</sup>

広瀬はこのように水俣第一小学校にいた頃、自分は水俣病に向き合っていなかったことを自戒の念を込めて述べている。梅田が述べているように「学校の先生たちはタブーとして水俣病問題を取り上げないなか、日々の忙しさの中で、広瀬武は、水俣病事件に向き合うことなく教員としての生活をしていた。

### 水俣病市民会議への参加

広瀬武が水俣病患者と関わるきっかけとなったのは水俣病市民会議への参加がきっかけである。公害問題が全国で深刻化する中で、1965年（昭和40年）5月頃、新潟でも水俣病患者が発見され、1967年（昭和42年）6月昭和電工を相手に新潟地裁に患者たちが提訴、裁判問題となっていた。水俣病市民会議の事務局長の松本勉は、発足する前の動きについて以下のように述べている。

その年の一月頃ではなかったろうか、来年一月頃新潟の患者さんたちが水俣に来るという情報があったことから、これを機に水俣でも患者の支援組織をつくらうという機運が高まっていた。

市議会でも活発に動いていた日吉フミコに、水俣病患者支援組織の会長になってくれるよう頼むと、日吉フミコは二つ返事で引き受け、それから二人で患者家族を回り始め、民水対（新潟県民主体水俣病対策会議）宛一通のハガキを書き送った。

「新潟における水俣病が社会問題となりましてより注目しておりますが、御当地における運動の活発な反面、地元水俣では、いまだ眠ったままの状態です。これには互助会内部の複雑な問題もありますが、市内の各民主団体も今まで手を差しのべなかったのも一つの原因です。これらの問題を克服して立ち上がるべく今患者の家庭を訪問したり、市内の民主団体に呼びかける作業をつづけておりますが、訴訟などについての資金はご当地ではいかがなされているでしょうか。新潟における闘いを勝利に導くためにも水俣でも立ち上がらねばならないと願っておりますので、御教示いただきたい。」

返事をくださったのは坂東克彦弁護士からで、長文の手紙と資料が届く。支援組織結成を呼びかけるために市内の活動家たちにも手紙を書いた。<sup>16</sup>

そして1968年（昭和43年）1月12日、水俣病が公式確認されてから12年目にして水俣で初めて患者支援団体「水俣病対策市民会議」が結成された。初会合において、「発足の目的は、1）政府に水俣病の原因を確認させるとともに第三、第四の水俣病の発生を防止させるための運動を行う、2）患者家族の救済措置を要求するとともに被害者を物心両面から支援すると定められた」<sup>17</sup>。「会の名称中『対策』は行政が使う言葉だという意見が後に出され、単に『水俣病市民会議』とすることに異議がなかったので一九七〇年（昭和四五年）八月『対策』を削除した」<sup>18</sup>。市民会議は、最初三十六名の会員をもってスタートした。個人加盟の運動体であり、会長に日吉フミコ、事務局長に松本勉、他には「医師、ケースワーカー、市職員、小中学校教師、作家」<sup>19</sup>などが参加し、その中に広瀬武もいた。市民会議発足当時、広瀬武は33歳で葛<sup>くす</sup>渡<sup>わた</sup>小学校に勤務していた時期である。会長の日吉フミコは、広瀬武の義母であり、広瀬の市民会議参加に影響を与えたことが予想される。

「最初市民会議の中に教師は4名参加し、のちに2名加わったのだが、彼らの中では運動のなかで教育労働者としてどういふことをやったらいいのかということが、常に問題になっており、それが水俣病と関わる最初であった」<sup>20</sup>と広瀬は言う。その参加した6人の教師というのは、幹事の石牟礼弘（石牟礼道子の夫）の他に、生伊佐男・梅田正敏・猶木勇・鶴山寅亀、そして広瀬武である。水俣芦北公害研究サークルの初代会長が鶴山寅亀、2代目が広瀬武、この2名は市民会議の最初のメンバーであった。水俣の大勢の教師たちの中で、最初市民会議に参加したのはたったこの6名であった。

<sup>15</sup> 広瀬武から聞き取り（一盛真、西垣光）2016年9月7日、水俣市もやい館にて

<sup>16</sup> 松本勉・上村好男・中原孝矩編『水俣病患者とともに日吉フミコ 闘いの記録』草風館、2001、p.108

<sup>17</sup> 丹野春香「水俣市における公害教育運動の基盤：『水俣病市民会議』を中心に」、『公害教育運動の基礎的研究 環境教育史研究の構築 研究成果報告書』2012、pp.32-33

<sup>18</sup> 松本勉・上村好男・中原孝矩編『水俣病患者とともに日吉フミコ 闘いの記録』草風館、2001、p.108

<sup>19</sup> 廣瀬武「私にとっての水俣病」、熊本県部落解放研究会『熊本県部落解放研究会 部落解放研究くまもと』号数不明、年不明、p.1

<sup>20</sup> 広瀬武から聞き取り（一盛真、西垣光）2016年9月7日、水俣市もやい館にて



この市民会議が発足した翌年度、水俣市教職員組合では以下のような動きがあったと広瀬は話す。

水俣芦北支部水俣市教職員組合の昭和 44 年度の組合の大会でね、水俣病と関わって支援運動に取り組むと言うことを徹底するんですよ、組合の方針。そして、水俣病を教えようと。それから水俣病患者を物心両面から支援して裁判闘争を支持しようと。こういう方針をたてて、そして組織に水俣病研究会というのを作った。で、もちろん私たちはその水俣病研究会に入っていくんですがね。まあこういう形で授業の取り組みができていくようになる。私が授業したのはまだこれより後でしょ。それで水俣病研究会に入ってその研究会のメンバーが市民会議の会員になっていく。そういう運動進めていくんですね。そしてもう裁判闘争になるわけですから、患者と一緒にあちこちに出かけていってカンパ活動なんかに取り組むんです。そういうなかで、だんだん患者と馴染んだりしていった、ということです。<sup>21</sup>

水俣芦北支部教職員組合がこのような組合の方針を決めたのには、市民会議発足と田中裕一の水俣病授業実践の影響を受けてのことと考えられる。この水俣病研究会の発足が水俣での授業の取り組みにつながっていった一つの出来事である。また市民会議の参加を通して、広瀬武など組合員たちは裁判闘争に向けて患者と行動を共にするようになり、市民会議の参加は広瀬武にとって一つの転期となったのであった。

### 水俣病との出会い

1968 年 1 月 21 日、市民会議の結成に向けて新潟水俣病の患者が水俣に来て、地元の水俣病の患者や支援者との交流会が行われた。広瀬武はこの時、初めて目の前にして患者の話を聞いたという。

その交流会で広瀬は、7 年前に水俣第一小学校で受け持った児童の母、中村シメに会った。その時、「何故ここに中村さんが来ておられるのかという疑問がまずわいた」<sup>22</sup>という。そして、話しているうちに中村さんが水俣病だと分かり、広瀬が中村さんの娘を受け持っていた時、中村さんのご主人が劇症水俣病で市立病院に入院していたということ、それから経済的に非常に困窮をしていたということを初めて知る。当時、学級で集金をしたときに中村さんの娘は一番最後にお金を持って来ていた。お金を持ってくるのが遅いとは思ったし、「『早く持ってきてね。』と催促することはあった」<sup>23</sup>が、なぜお金を持って来るのが遅れるのかっていうことを知らないままにその子を一年間受け持っていた。「先生父ち

ゃんが水俣病だったもん」と中村さんに水俣病宣言をされて、「初めて、あーそうだったのかと、だから金を持ってくるのが遅かったんだな」<sup>24</sup>と、子どもの生活背景を知らないままに子どもに関わっていた自分が恥しかった。「それが私の水俣病との出会いと言いましようかねえ。関わり始めた一番大きな要因です」<sup>25</sup>と広瀬は語っている。

広瀬は、この交流会での出来事を「水俣病との出会い」だとしている。それ以前にも「水俣病」のことを知っていただろうし、市民会議に参加するような教師だから水俣病に関心は持っていたはずだ。」それだけ広瀬にとってこの出来事が衝撃的なことであった。広瀬は、担任の仕事のなかの一つとして特に何も考えず集金をし、中村さんの娘にも「早く持ってきてね」と声をかけたのであろう。その自分が言った何気ない一言を、中村さんの娘はどんな気持ちで受け取っただろう、彼女にとっては重い言葉だったのではないか。教師として子どもの生活背景を知らなかった、そして生活背景を知らないために子どもの気持ちを考えることができていなかったと、この気づきが今までの教師としての自分を反省させ、広瀬にとって大きな転機となった。

## 第 3 章 水俣病事件の授業実践

### 水俣病事件の教材化

1963 年から 9 年間、広瀬武は山間部の葛渡小学校で勤務している。「水俣病との出会い」の後の 1971 年 2 月、初めて 5 年生の社会科学習で水俣病を教材化し、授業を行った。授業当時広瀬は 36 歳であった。彼は授業をするようになった大きな要因について以下のように語ってくれた。

授業をするようになった大きな要因というのはやっぱり患者から言われたんですよ。「先生たちはどうして水俣病を教えないんですか。先生たちがもっと早く立ち上がってくれていたら、自分たちや自分たちの子どももこんなに水俣病に苦しむことはなかったです。先生の仕事は教えるのが仕事でしょ。教えてくださいよ」と。それで僕ら何人かで、当時はね、お互い気の合うもの同士集まって、酒飲みながら教育論議をやりましたよね。そのなかで、患者から追及された水俣病の授業のことはどうするかっていうことになったわけで。結局条件的に言えば、私の学校が一番やりやすいんじゃないかと。というのはね、葛渡小学校の校長が非常に組合運動に対して理解があった。そして学校長自身がね、水俣・芦北の組合を作った人間なんですよ。そういうこともあるし、1 年生から 6 年生まで 6 学級だったんですがね。全部組合員なんですよ、日教組。それで授業やるとなったらやっぱり

<sup>21</sup> 広瀬武から聞き取り（一盛真、西垣光）2016 年 9 月 7 日、水俣市もやい館にて

<sup>22</sup> 安藤聡彦「水俣市における『水俣病の授業』の誕生」、『公害教育運動の基礎的研究 環境教育史研究の構築 研究成果報告書』、2012、p.48

<sup>23</sup> 廣瀬武「私にとっての水俣病」、熊本県部落解放研究会

『熊本県部落解放研究会 部落解放研究くまもと』号数不明、年不明、p.2

<sup>24</sup> 広瀬武から聞き取り（一盛真、西垣光）2016 年 9 月 7 日、水俣市もやい館にて

<sup>25</sup> 同上

り葛渡小学校が一番やりやすいんじゃないかということ  
です。それで私がするようになったわけですね。<sup>26</sup>

広瀬は市民会議に参加し患者と関わりをもつようになる  
なかで、患者に言われた言葉がきっかけで授業に取り組むよ  
うになった。その授業に初めて取り組んだ気持ちを以下のよ  
うに述べている。

勇気がいりましたよね。当然問題になるだろうというこ  
とは覚悟しとりましたけどね。そのときにね、裁判をして  
いる患者さんたちが私を励ましてくれた。「先生、心配せん  
でよか」って。「私たちがついとるけ。正義は勝つ。正義は  
必ず勝つ。」そういうことを言って勇気づけてくれる。そう  
いう患者さんたちとは今でもずっとやっぱり付き合いを  
させてもらっています。<sup>27</sup>

並大抵ではない覚悟であったと推測できる。教師人生に影  
響を与えたとしても子どもに伝えなければならないと思った  
にちがいない。大切なことは、広瀬が授業を行うきっかけを  
作ってくれたのも、後押ししてくれたのも水俣病患者の存在  
があったということだ。

教科書の単元の終わりの方に「工業の発展とともに色々な  
問題が出てきました」と記述されていたので、広瀬はそこに自  
分で作った「工業の発展のかげで」という題材を投げ入れた。  
その指導計画は以下の通りである。<sup>28</sup>

#### 1) 公害を勉強することのねらい

工業の発達、わたしたち国民の生活をゆたかに便利に  
しているが、いっぽうでは工業の急そくな発展によって、  
いろいろな困った問題が起こり、国民生活をおびやかして  
います。特に公害はいまや日本中で国の大きな問題になっ  
ているばかりではなく、世界の問題として考えられていま  
す。ここでは、工業の発展によって起きた問題「公害」を勉  
強し、人命の尊さ、幸福な生活とは何か、を考えることに  
します。

公害の原点といわれる「水俣病」を教える基本的な考え  
方として次のような指導のねらいを設定した。(1)「水俣  
病」は何のつみもない人たちが、工場の無責任な有機水銀  
たれ流しによるものであること→企業優先のかげに人命  
無視 (2) 公害をにくむ子どもを育てる→人権意識のこ  
う揚 (3) 生活の現実を見つめ、社会の矛盾を考えさせ  
る→公害の社会的責任を追及する。

#### 2) 勉強することがら (計画と時間)

①工業製品と私たちの暮らし (1時間)

②工業の発達につれて、どんな問題が起こってきたか。  
(3時間)

#### ③身近なところで起った「水俣病」について考える (13 時間)

i.水俣病について見たり、聞いたりなどして知って  
いることを話し合う。(2時間)

ii.水俣病はなぜ起こったのだろうか、話し合ったり、  
聞いたりして考える。(2時間)

iii.水俣病はいまどんな問題をかかえているのだろう  
か。患者さんといっしょに勉強する。(3時間)

iv.公害追放運動の大切なわけを考える。(3時間)

v.公害地図 (よごれている日本) をかく。(2時間)

vi.水俣病を勉強して、自分が考えたことや思ったこと  
を作文や感想文にかく。(2時間)

vii.水俣病のことについて、もっと知りたいことを出  
し合う。(2時間)

3) 水俣病に対する子どもたちの意識調査 (授業に入る  
前、2月8日調べ) ……設問 13項目

4) 患者、浜元二徳さんに対する質問項目 (2月13日調  
べ)

5) 患者の浜元さんから話を聞く会 (2月16日、本校  
教師8名、他校より校長1名、教師3名参加)

6) 水俣病の授業に使った資料

- ・水俣病関係の新聞記事 (スクラップ)
- ・写真集「水俣病」(桑原史成)
- ・朝日グラフ (45年・水俣病特集号)
- ・水俣病患者 (胎児性患者) の写真
- ・胎児性水俣病患者も母親の声 (録音テープ)
- ・水俣病年表: 教師の自作プリント及び応用紙掲示

水俣病授業の対象学年は、田中裕一の授業が中学校2年生  
で、この授業は小学5年生と3学年と異なるので直接比較は  
できない。授業時間は田中裕一の授業が3時間であったのに  
対し、この授業は全17時間、しかも13時間は水俣病につい  
て考える時間であり、非常に時間をかけて水俣病を教えよう  
としていることが分かる。水俣の子どもたちに対する授業で  
あるため、一方的に知識を教えると言うよりは、子どもたち  
が知っていることから授業を始めるという形をとっている。

#### 患者を教室に

広瀬はこの授業計画の中で教室に水俣病患者の浜元二徳  
に入ってもらう時間を設けている。

私の授業のあとを受けて、浜元さんが自分の水俣病を語  
ることによって学習を深めた。浜元さんは、不自由な体の  
ふるえる手でチョークを持ち、たたみかけるようにゆっく  
りゆっくり話し、黒板に「公害・水俣病」と書いた。<sup>29</sup>

<sup>26</sup> 広瀬武から聞き取り (一盛真、西垣光) 2016年9月7  
日、水俣市もやい館にて

<sup>27</sup> 同上

<sup>28</sup> 安藤聡彦「水俣市における『水俣病の授業』の誕生」、『公

害教育運動の基礎的研究; 環境教育史研究の構築 研究成果  
報告書』2012、pp.53-54より重引用

<sup>29</sup> 廣瀬武「私にとっての水俣病」、熊本県部落解放研究会  
『熊本県部落解放研究会 部落解放研究くまもと』号数不

水俣病問題がタブー視されている水俣で、教育のなかで水俣病患者の話を書くということは、教師としてなかなか踏み切れないことだったはずである。広瀬は浜元二徳との関係について、「いつもお互いに行ったり来たりしよった仲」<sup>30</sup>であったと話しており、浜元二徳は、「先生が授業するなら僕は行く」<sup>31</sup>と言って、教室に来てくれたと話している。この浜元二徳も広瀬武の教師人生に大きな影響を与えた人物である。

教室に患者が来るのは初めてだったため朝日新聞がこれを記事にした。これが水俣市の校長会で問題になってしまう。「『広瀬がした授業は患者を教室に呼んで生々しい』『子どもにはその生々しい姿がうつるんじゃないか』『しかもその患者は裁判の患者だ。』」と。<sup>32</sup>やはりチッソの城下町といわれる水俣では、「水俣病授業を『偏向』とみる空気が強く、公害を知らぬふりの教師たちもいた」<sup>33</sup>という。だが、校長会で広瀬の味方をしてくれる人もいた。

一番嬉しかったのは、私の学校の校長、谷村校長というんですがね、校長会で問題になったときに弁護してくれるんですね。「広瀬くんがやったような授業はあっていい」と。「逃げちゃいかん」というようなことを言うんですね。それからもう一人、現在はまだありませんけどね、水俣三中の溝辺校長も来ておりましたので、溝辺校長も谷村校長と同じようなことを言うんです。「もう今の時期だから当然そういうことはあっていいんじゃないか」と。カバーしてくれた。これ嬉しかったですよね。<sup>34</sup>

水俣市議会でも問題になる。水俣市議会ではチッソ出身の議員が広瀬の授業を批判する。「偏りすぎている」「水俣病だけが公害ではない」「わざわざ水俣病を取り上げんでもいいんじゃないか」「広瀬がやったのは日教組の教宣活動の一環だ」と。そういう形で問題として取り上げる。あとでその議員の発言は議事録から削除されたが、そういうことがありました。<sup>35</sup>

## 寝た子を起こす

くずわたり

葛 渡 小学校で授業実践を行った翌年、広瀬は袋小学校に転勤となり、1972年から1979年までの7年間は袋小学校に

勤務する。「袋校区内には六つの患者多発地区があり、校区内の認定患者は、全認定患者の四六パーセントにものぼっていた（一九七三年）」<sup>36</sup>という。袋小学校の校区は水俣病が最も多発している地域だった。だが、「袋小のこどもは家族に患者がいても、学校では水俣病学習の経験はなかった」<sup>37</sup>。「患者多発の現地であるために、教師が水俣病を取り上げて授業することは難しかったのだ」<sup>38</sup>と広瀬は述べている。この袋小学校での教員生活について、広瀬は、「袋小の7年間というのは、寝た子を起こす時期だった。水俣病は眠ったままでしょ。実際は眠っちゃいないんだけど、表に出らんような形で潜んでいたんね。それは、掘り起こすというのかな。学校教育のなかでもそれを掘り起こさんといかんし、地域の中でもやっぱり掘り起こしていかなんといふことで」<sup>39</sup>と話している。

私が行ったときはまだ水俣病の授業に取り組む雰囲気になかったですからね。私が職員会議の時にいつも発言して、水俣病の一番中心になっている袋地区、そういうところで地域の実態を抜きにしては学校教育は成り立たんというようなことを私は常々言っていましたから、水俣病授業を提起するわけです。<sup>40</sup>

広瀬が袋小学校に赴任してから「入学してきた一年生については、学校として家庭環境調査を実施」<sup>41</sup>するようになった。家庭環境調査を実施することで、それまでは見えてこなかった子どもの実態が少し見えるようになった。だが、この調査についてはクレームが出た。

二人の保護者から私に抗議の電話や手紙がきたんですね。「今更水俣病ほじくって、子どものためになるのか。」って。すごい抗議でしたよ。その時はね、私はまず手紙を書きました。<sup>42</sup>

その時書いた手紙である。

家庭調査で水俣病関係のことを調べるのには目的があります。それは、公害教育をするうえで必要なのです。

現在、公害教育については学校教育の中に位置づけられ、どこの学校でも取り組んでいます。本校でも水俣病多発地

---

明、年不明、p.3

<sup>30</sup> 広瀬武から聞き取り（一盛真、西垣光）2016年9月7日、水俣市もやい館にて

<sup>31</sup> 同上

<sup>32</sup> 同上

<sup>33</sup> 廣瀬武「私にとっての水俣病」、熊本県部落解放研究会『熊本県部落解放研究会 部落解放研究くまもと』号数不明、年不明、p.4

<sup>34</sup> 広瀬武から聞き取り（一盛真、西垣光）2016年9月7日、水俣市もやい館にて

<sup>35</sup> 同上

<sup>36</sup> 廣瀬武「私にとっての水俣病」、熊本県部落解放研究会『熊本県部落解放研究会 部落解放研究くまもと』号数不

明、年不明、p.4

<sup>37</sup> 同上

<sup>38</sup> 同上

<sup>39</sup> 広瀬武から聞き取り（一盛真、西垣光）2016年9月7日、水俣市もやい館にて

<sup>40</sup> 広瀬武から聞き取り（一盛真、西垣光）2016年9月7日、水俣市もやい館にて

<sup>41</sup> 廣瀬武「私にとっての水俣病」、熊本県部落解放研究会『熊本県部落解放研究会 部落解放研究くまもと』号数不明、年不明、p.4

<sup>42</sup> 広瀬武から聞き取り（一盛真、西垣光）2016年9月7日、水俣市もやい館にて

区という地域実態をふまえ、袋小学校としての公害教育に取り組んでいます。袋地区は水俣病患者が多発しており、本校児童のなかにも家族に患者がいるという現実をさておけることはできません。学校教育は、地域の実態、家庭の実態、こどもの実態を十分にふまえて行わなければなりません。現実にはきびしい実態がある以上なおさらのこと公害教育が必要です。本校で取り組む公害教育は、次の四つの目的をもって進めています。①偏見を排除し、差別を許さない。②水俣病を正しく認識し、公害を許さない。③人間の尊厳や人命の尊重を考えさせる。④自然を愛護し、環境の保全に努力する。……患者家族であるということで世間の冷たい視線におびえ、偏見のために差別を受けるということが許されていいもののでしょうか。このような問題こそ、教育が考えなければならないし、教育の根本に関わることです。……かつて水俣病が伝染病、奇病、ハイカラ病などと偏見のなかで、患者やその家族に対して村八分にも等しい差別があったと聞いています。その当時、学校の教師は教育の場でこれらの問題をさけてとおっていたし、むしろ差別する側に立ったという誠に恥しい経験をしています。私たちは今、その教訓を学ばなければならないと思っています。二度と過ちを繰り返すことは許されないのです。<sup>43</sup>

この手紙を書いたあと、家庭訪問でまた語り合っ、て、そして私のそのやり方をだんだん理解してくれるようになってね。あとでは私の支援者でしたよ。そういう家庭もありました。抗議をしてきた二人の保護者は、お兄さんと妹さんになるんだけど、実はその二人の弟が水俣病の重症患者だった。お姉さんも亡くなってる、水俣病で。そういう家庭だったから余計やっぱり敏感だったわけだね。それで今更水俣病を子どもにほじくって教えて、子どものためになるのかという痛烈な批判だったわけですけど、やっぱり時間が解決してくれましたね。あとでは私の教育に対して非常に理解を持ってもらって。「先生、いざっちゅう時は加勢するけん」って。そういうことを聞くようになりましたね。やっぱりねえ、家族に水俣病患者がおって死んだり、現在病気と闘っているようなところは、すごくね、苦しいんですよ。そういうのがわかっていながらやっぱり、子どもたちと一緒に考えていかないとやいかんと思ったんですよ。<sup>44</sup>

広瀬は袋小学校で最初に3年生を担当し、そこで水俣病の授業に取り組む。「大きな工場ができて」という題材で、4時間の計画を立てて授業を実施した。受け持った3年生は

28名で、「そのときの学級実態は、二八名在籍中水俣病の検診を受けた者一二名、同居家族中もしくは三等親内の親族中に認定患者がいる者七名」<sup>45</sup>であった。

そして、6年生を担当したときは、「水俣病という名前に対して」という題材で授業をした。この授業を終えた後に児童が作文を書く時間があつたのだが、ある児童が「父の死」という作文を書いた。

私の父は私が五年生のとき、水俣病で死んでしまった。チッソ工場が流した水銀のために、父の命はうばわれてしまった。チッソが毒をふくんでいる廃水を海に流しさえしなければ父は死ななくてすんだのに。

父は急に足が動かなくなったり、手や足がしびれたり、目まい、けいれん、ひきつけをしょっちゅう起こしていた。なかでもひどかったのはひきつけだった。ちょっと重たい物を持っただけでひきつけが起きていた。夜ねていると、からす曲がりといって足の指がきゅっと曲がってひきつけを起こしたこともたびたびだった。また、道を歩いている時足がもつれて、あっちこっちにころんではがをしたこともあった。

父の病気はあらゆる病院にかかり、入院と退院のくり返しだった。熊本大学の病院にも入院してちりょうを受けたが、有機水銀におかされた父の体はもう、もとへはもどらなかった。

父は、こんな苦しい病気とたたかいながらも、いつも明るい笑顔を見せていた。父は、やさしかった。よく何でも教えてくれた。

父が死んだとき、とっても悲しかった。父をうしなってどんなにさびしいことか、たてようもなかった。

今私たちは五人で暮らしている。家族は母、兄二人と私で、母は夏の間だけ漁をして働き、冬は働き口がない。いちばん上の兄は、耳が悪くて手術したので働いていない。だから、すぐ上の兄が働いて母を助けている。私もたった一人になってしまった母を助けて、家の手伝いをしている。

水俣病はおそろしい。私の父のようなことは二度と起こってほしくない。<sup>46</sup>

彼女は授業のなかで、泣きながらこの作文を読んだと言う。おとなしくて控えめな性格の児童が教室で「水俣病宣言に踏み切った」<sup>47</sup>。

この子たちの思いを授業を通してみんなで共有し合うことは、水俣にとって必要なお互いを理解し合う手段となった。「袋小には家族に水俣病患者をもつこどもたちが多かつ

<sup>43</sup> 廣瀬武「私にとっての水俣病」、熊本県部落解放研究会『熊本県部落解放研究会 部落解放研究くまもと』号数不明、年不明、pp.4・5

<sup>44</sup> 広瀬武から聞き取り（一盛真、西垣光）2016年9月7日、水俣市もやい館にて

<sup>45</sup> 廣瀬武「私にとっての水俣病」、熊本県部落解放研究会

『熊本県部落解放研究会 部落解放研究くまもと』号数不明、年不明、p.5

<sup>46</sup> 廣瀬武「私にとっての水俣病」、熊本県部落解放研究会『熊本県部落解放研究会 部落解放研究くまもと』号数不明、年不明、pp.6・7

<sup>47</sup> 同上、p.7



た。私たち袋小の教師は、このような子どもたちの思いや痛みを分かち合うことの大切さを、子どもたちから教えられることが多かった。」<sup>48</sup>その子どもたちと関わって、子どもの思いや痛みを分かち合おうと取り組んだ。

### 患者に学ぶ

広瀬を含めた市民会議員の教師は、裁判闘争支援に参加するなかで患者と関わりをもった。広瀬は、下田綾子さんの実家である田中義光さん宅にもよく訪問して聞き書きをしていた。また、廣瀬は、胎児性患者上村智子さん（故人）の弟妹を袋小で担任し、上村家に通っていたという。「私の上村家通いは一つには、学校に出来ない母親に学校のことやこどもの様子を報告することと、上村家の水俣病を学ぶためであった。」<sup>49</sup>「学校に出来ない母親」というのは、母親の良子さんは毎日智子さんの看病に明け暮れ、寸時もそばを離れることができない状態で授業参観や年一回の運動会にも来ていなかったのである。

上村家はこのような家庭状況であったのだが、母親の良子さんは「智子は宝子ばい」と言っていた。「『智子一人が毒を吸いとってくれたから後から生まれてきた子どもはなんとかね、健康で成長してくれた。そういう意味で私の一家を助けてくれたのは智子です。だから智子は宝子ばい』って。それはもう母親の気持ちとしてね、非常に貴重な言葉だと思います。」<sup>50</sup>と話している。また、「上村家は智子さんの存在を中心にしてみんなで助け合って生活が営まれている。非常にそこに人間愛と言いましようかね。そういうものを強く感じるんです。」<sup>51</sup>智子さんの存在が上村家では生きる望み、生きていくための支えであった。

教師が、家族に水俣病患者を持つ子どもやその家族と関わり「人間愛」を学ぶ。広瀬は他にも坂本ふじえさん、しのぶさん、浜元二徳さんなど患者との関わりの中で「自分の教育の財産が蓄積された」<sup>52</sup>と話す。非常に苦しい悲しい思いを経験した人、経験をしたからこそ出てくる思いや考えがあり、広瀬は関わることでそれを学んだ。

## 第4章 水俣芦北公害研究サークルの教育実践

### 水俣病教材・資料集の作成

水俣芦北公害研究サークルは1976年8月、熊本県教職員組合教研集会の「公害と教育」分科会を母体として発足した。会長には鶴山寅亀がつき、22名の会員が所属した。結成の経緯について以下のように書かれている。

教研集会は年二、三回実施されるだけであり、研究を深めるためには時間的にも質的にも不十分な点があるし、深く広く推進するためにもサークルが必要であるとして、分科会の同意を受けて結成されたものである。

結成時、会員は水俣芦北の小中学校に勤務する教職員に限られていたが、八二年に地元高校教師の加入があり、その後水俣病運動支援者の加入もあった。<sup>53</sup>

このサークルの特徴は、水俣病教材・資料集を編纂したところにある。この教材・資料集『水俣病・授業実践のために』の発刊の経緯について以下のように書かれている。

サークル結成1年目に、日教組全国教研集会「公害と教育」分科会で提起された、総合学習について討議を進め、学年別必須学習項目の整備、年間計画作成に向けて取り組みを始めた。翌77年8月、第2回総会において「学年別学習計画試案」の作成が確認され、必須学習項目の選定、学年別項目配当の作業に入った。そして、10月の定例会で「水俣芦北公害研究サークル公害学習の基本理念」を確認した。

指導計画は別紙の通り、小中学校共通して各学期の中心課題を設定し、学年別教材の配置及び必須学習事項・参考資料を掲載することにした。

78年に入り、指導計画に基づく学年別授業実践を水俣芦北地区のサークル会員に依頼し、8月の定例会において実践報告書の完成をみた。年間計画の実践依頼や報告書を検討するなかで、参考事項や資料をもっと具体的にという要望が強く出て、その必要性があると分析集約した。もちろん、そこまで示すことの是非、授業者が資料収集に努力すべきではないかという議論も重ねた。その上で、だれでもすぐに取り組める、すぐに使えるルーズリーフ式の「指導計画と資料」を教師用・児童生徒用に分けて詳しく丁寧なものとして作成することにした。この時期は、県内はもちろん全国各地から水俣病現地学習が多くあり、そのたびに資料を作成したが不統一もあり、サークルの省力も考えてのことであった。

このようにして、79年8月の第4回総会、サークル結成3年にして水俣病教材・資料集『水俣病・授業実践のために』の発刊が実現した。<sup>54</sup>

田中裕一が中心となり、熊本県教職員組合が作成した『公害と教育—水俣病を中心として現場実践のために』が「赤本」と呼ばれているのに対し、水俣病教材・資料集『水俣

<sup>48</sup> 同上、p.7

<sup>49</sup> 廣瀬武「私にとっての水俣病」、熊本県部落解放研究会『熊本県部落解放研究会 部落解放研究くまもと』号数不明、年不明、p.12

<sup>50</sup> 広瀬武から聞き取り（一盛真、西垣光）2016年9月7日、水俣市もやい館にて

<sup>51</sup> 同上

<sup>52</sup> 同上

<sup>53</sup> 廣瀬武「私にとっての水俣病」、熊本県部落解放研究会『熊本県部落解放研究会 部落解放研究くまもと』号数不明、年不明、p.10

<sup>54</sup> 水俣芦北公害研究サークル『水俣病・授業実践のために 学習材・資料編 2007 改訂版』水俣病センター相思社、2007、改訂にあたって

病・授業実践のために』は「青本」と呼ばれている。「水俣芦北の教師たちは、自分たちで水俣の患者と関わり、聞き書きをして、この「青本」を編纂した。広瀬武も聞き書きをしに患者家庭を回っていた。この聞き書きの内容は、「青本」の後半の資料として表れている（資料として巻末に目次を掲載しておく）。「赤本」は公害学習の手引きなので水俣病以外の四日市公害やイタイイタイ病などの公害についても取り上げられていたが、「青本」は水俣病のみを取り上げた教材になっている。小学校、中学校の水俣病学習指導計画とそれぞれの学年の指導案が掲載されている。小学校では、学活・道徳・社会科の時間に、中学校では、学活・総合・社会科の時間に位置づけられている。

内容的な特徴は2点ある。まず指導計画の構造が、小中ともに①「水俣病の苦しみと怒り」、②「水俣病の構造と歴史」、③「わたしたちと環境」という流れで構成されていることである。第2に、田中裕一の教育実践や「赤本」では追究されていなかった水俣病事件の「差別」の問題が、「青本」では重要な問題として挙げられている。「青本」は、水俣の地域で起きている問題に根差した教材・資料集となっており、その後、4回の改訂を続けている（1981年・95年・2007年・16年、なお、本稿では2007年版を使用した）。また、1989年には高校生向けの「黄本」も作成している。

現在の水俣芦北公害研究サークルについて、広瀬武は、「現在のサークルは、当時から比べたら会員数も少なくなっておりますけども、私たちが手をつけたことは今のサークルに引き継がれていると思っています」<sup>55</sup>と話している。

## おわりに

水俣病事件は人体被害や人々の生活破壊だけでなく人と人との関係を破壊し、偏見や差別、貧困に多くの人を苦しめた。これらの問題に抗するべき立場の教師までもが見て見ぬふりをし、差別する側に立った。子どもを苦しめてしまっていた。

しかし、広瀬武に見たように水俣病患者と関わるなかで水俣病事件に向き合うようになる教師たちが水俣にはいた。地域の実態・子どもの実態を抜きにして教育は行えないとして水俣病授業に取り組む。水俣病授業の実践を通して、子どもの悲しみに共感し、寄り添う生き方を選んでいった。

「人のことなんか深く考えんでもよか。それより、勉強せにゃあかんたい」。この言葉は、日本の教師の今を示す言葉でもある。水俣病事件の教育実践は、子どもの悲しみを教室で共有することを通して、人と人をつなぎ付け共感する社会的な「学力」を豊かにする教育実践である。

<sup>55</sup> 広瀬武から聞き取り（一盛真、西垣光）2016年9月7

日、水俣市もやい館にて

## 広瀬武略年譜

年	おもな出来事	広瀬武
1909 (明治 42)	水俣に肥料工場ができる	
1921 (大正 10)	アセトアルデヒド酢酸工場ができる	
1932 (昭和 7)	アセトアルデヒド工場を増設 工場排水を百間港へ無処理で流す	
1934 (昭和 9)		広瀬武、水俣で生まれる
1942 (昭和 17)	最初の水俣病患者発生？	
1953 (昭和 28)	水俣病患者第1号発生 (この時は原因不明)	
1955 (昭和 30)		水俣第一小学校勤務（8年間）
1956 (昭和 31)	水俣保健所、水俣奇病の調査に乗り出す	
1957 (昭和 32)	水俣病患者家庭互助会を結成（8月）	
1959 (昭和 34)	互助会、工場と見舞金契約を結ぶ（12.30）	
1963 (昭和 38)		葛渡小学校勤務（9年間）
1968	水俣病対策市民会議ができる（1.12）	水俣病対策市民会議に参加

(昭和 43)	新潟水俣病の人たちと水俣病患者の交流会 (1.21) 国が水俣病の原因はチッソ工場の排水に含ま れている有機水銀であると発表 (9.26) 竜南中学校で田中裕一が水俣病授業行う (11.20)	交流会で「水俣病と出会う」(1.21)
1969 (昭和 44)	日教組全国教育研究集会が熊本で行われ、田 中裕一が「水俣病授業実践」の 特別報告を行う (1.25)	
1971 (昭和 46)		葛渡小学校 5 年社会科で初の水俣病授業 「工業の発展のかげで」行う (2 月)
1972 (昭和 47)	熊本県国民教育研究所、 「公害教育」部会を設置 熊本県教組、公害学習の手引書『公害と教 育』(赤本) 発刊 (10 月)	袋小学校勤務 (7 年間) 袋小学校 3 年の社会科で水俣病研究授業 「大きな工場ができて」行う 『赤本』研究開始 (6 月)
1973 (昭和 48)	水俣病裁判判決、患者勝訴 (3.20) 水俣病授業一斉開始 第三回「公害と教育」研究全国集会が 水俣で行われる	袋小学校の取り組みを報告
1976 (昭和 51)	水俣芦北公害研究サークル発足 (8 月)	
1979 (昭和 54)	教材・資料集『水俣病・授業実践のために』 (青本) 発刊	
1980 (昭和 55)		水俣第二小学校勤務 (7 年間)
1987 (昭和 62)		石坂川小学校勤務 (3 年間) 水俣芦北公害研究サークルの 2 代目会長となる (～2000 年)
1990 (平成 2)		深川小学校勤務 (6 年間)
1991 (平成 3)	第 42 回全国同和教育研究大会 (熊本市)	浜元二徳氏と「私の水俣病」を共同報告
1995 (平成 7)		退職

## 目 次

改訂にあたって	ページ		ページ
1 水俣病の基本認識として	1	(8) 「くるいねこ」	45
2 水俣病年表	4	(9) 「おにいちゃん」	46
3 不知火海沿岸図	13	(10) 「水俣に大きな工場ができて」	48
4 水俣病認定申請処分状況	14	(11) 「胎児性水俣病」	49
5 市町村別等認定申請者数	15	(12) 「ネコ400号」	51
6 協 定 書	16	(13) 「とれない魚」	52
7 認定制度の問題	17	(14) 「この子とともに」	53
8 水俣病事件——補償協定後の18年	18	(15) 「無言の告発21年」	58
9 水俣病問題は終わっていない —あらためて解決へ前進を—	20	(16) 「水俣病で夫と子を失った人の記録」	59
10 小学校年間指導計画	21	(17) 「人間ば人間として見てくれとらんもん」	64
11 中学校年間指導計画	22	(18) 「漁師さんたちの怒り」	67
12 小学校指導事例	23	(19) 「見舞金契約調印のようす」	68
13 中学校指導事例	31	(20) 「患者さんの怒り」	69
14 文献資料案内	33	(21) 「患者さんと市民」	70
〈教材・資料編〉		(22) 「仕事ばよこせ！人間として生きる道ばつくれ！！」	71
(1) 水俣案内図	35	(23) 「よっ水俣病」	73
(2) 高学年用年表	36	(24) 「水俣病という名前に対して」	74
(3) 水俣病患者分布図	38	(25) 「若い患者の発言」	76
(4) 申請しても切り捨てられる・水俣病認定申請データ	39	(26) 「丁君の告発」	77
(5) 水俣のうつりかわり	40	(27) 「話したいと思うようになりました」	79
(6) 見舞金契約書	43	(28) 「こんにちは胎児性水俣病のしのぶです」	81
(7) 「しゃくらん しゃくと がっこうに いくと」	44	(29) 「海が好き、人が好き、水俣が好き」	83

※本稿の分担について：共同の聞き取り調査では、主に一盛がインタビューを行い、西垣が文字起こしを行った。それに基づき西垣が草稿をまとめた。この草稿は西垣光「水俣病事件と教師—水俣の教師・広瀬武に着目して—」という形で鳥取大学に卒業論文として提出されている。この草稿を一盛が課題設定・結論の修正、章構成を組み替えし、リライトしたものが本稿である。